

英語はなぜ日本人には難しいのか： 日本語と英語の発音上の根本的違い

清水 英之

序文

日本における英語教育は、音声による相互理解という観点から見ると、失敗を重ねているという見解にならざるを得ない。しかし、立派に英語を話し社会で活躍している日本人、また立派に英語を話す日本人英語教師は多い。この事実から理解できることは、日本人が英語を話すことは可能だということである。しかし、どうして日本の英語教育は音声でのコミュニケーション能力を育成するのに失敗を重ねているのだろうか。この問題を解決せずに綿々と従来の英語教育を続けることに教師として責任を感じている先生方も多々いらっしゃると思われる。また、多くの学者や英語教師がこの問題に取り組んで研究し成果を発表していることも事実である。この論は、なのはどうして日本の音声面での英語教育は成果を挙げられないのかという問題に終止符を打とうという試みである。

筆者のこれまでの研究の結果、日本語と英語の発音上の明らかな違いが浮かび上がった。それは、声門閉鎖音の使用法にある。声門で呼気を止める方法は、音声学的には子音と分類されている。この声門で呼気を止めるという現象が日本語と英語の発音の大きな違いの原因になっている。発話の時に呼気を声門で止めることが当たり前の言語にとって、声門で呼気を止めることが不自然な言語は、まさに異文化として脳がカルチャーショックを起こす困難な言語なのである。この困難を乗り越えるには、科学的な視点に立って、双方の言語の発声法の違いを観察し、その違いを理解し、異なる現象を学習し、習得しなければならない。

この論の第1章では、日本語と英語の母音の発音について検討し、その明確な違いを理解する。第2章では、双方の言語の子音の使用法について検討し、その明確な違いを理解する。第3章では、それらの違いを日本の英語教育の中でいかに教えていくかという具体的な方法を提案する。

第1章

日本語と英語の母音の音質の違いについては、本学紀要の第13号⁽¹⁾で若干検討した。注目されるべき事実は、発声法の違いと舌の動きの違いであった。この章では、音節という観点から日本語と英語の発音方法の違いについて再検討したい。

1-1 発声法の違い

前回の議論では、英語のリズムを生じさせるには、腹筋を膨らませて息を吸う腹式呼吸と腹筋を収縮させて発声する必要性を強調した。この動作により英語の母音は強い呼吸により日本語よりも強く発音されることを明確にした。一方、日本語の母音の発音は、とくに強調しない限り、通常はどの母音もとくに強調せず同等の強さで発音される。この日本語の母音の発音方法は、腹筋に力を入れる現象ではなく、肋間筋の動きを基に息を吐きながら発声する現象といえる。その区別を明確化して言うならば、日本語は胸式呼吸による発声の仕組みを自然とするのであり、英語は腹式呼吸による発声の仕組みを自然としている。つまり、日本語の発声は日本人には自然であるが、英語の発声は日本人には不自然なのだ。この不自然さが英語の発音の難しさと理解されるし、学習によって克服されなければいけない異文化の現象なのである。

1-2 舌の動きの違い

上記の胸式呼吸を基盤とする発声と腹式呼吸を基盤とする発声法の違いは、母音を発音する時の調音器官の問題に関連する。前回の議論では、日本語の場合は舌をよく動かして母音の違いを調音しており、英語の場合は顎の動きと唇の動きを変化させ母音の調音をしている点を指摘した。具体的にこの違いを確認するためには、舌を動かさず（舌をだらりとさせたまま）「あ、い、う、え、お」と発音してみればよい。明確な母音の区別ができなくなることで英語の母音との音質の違いが感覚的に理解できる。

ここで、さらに検討すべきは、音声学的に「前舌母音 (front vowel)」「中舌母音 (central vowel)」「後舌母音 (back vowel)」と呼ばれる用語⁽²⁾の具体的理解である。日本語の場合、「い」「え」「あ」と発音すると、舌が前方に動く（舌の比較的前の部分に意識が集中する）ように感じられる。一方、「う」「お」は、舌が後に（奥に）動く（舌の比較的奥の部分に意識が集中する）ように感じられる。その他、「とうきょう」と発音した場合、最初の「う」と最後の「う」は、はっきり発音されず、「とーきょう」のように発音される。この場合は、標記では「う」だが、舌の動きに注目すると、舌が前にも後にも動かず（舌の前部にも後部にも意識が集中されず）「お」に近い音になり、この舌の位置が中舌母音と言われる母音の発音であろうと理解できる。しかし、このような舌の動きを英語に当てはめて

みると全く日本語と異なる現象が浮かび上がる。

結論的に言えば、英語では舌それ自体を動かさないことが原則であるから、舌の位置を変化させるには、他の部分を動かす必要が生じる。つまり、英語における「前舌」「中舌」「後舌」という用語の実体は日本語と同じではないのである。このことに気づかず日本では日本語の現象を中心に異文化である英語の母音の発音を、カタカナなどを使って、まねる学習に陥っているといえよう。それでは、英語では、どのようにして舌の位置を変化させるのだろうか。

英語音声学の本を読めば理解できることだが、英語の母音の発音では、「顎の上下動」と「唇の動き」が必要とされる。顎の上下動によって舌の位置を変化させる現象は、「高母音 (high vowel) または狭母音 (close vowel)」および「低母音 (low vowel) または開母音 (open vowel)」と呼ばれている。唇については、丸める動きが伴う「円唇母音 (rounded vowel)」唇を丸めない「非円唇母音 (unrounded vowel)」という分類がなされている。

しかし、上記のような分類がなされ一見英語の母音の発音が理解できるような錯覚に陥るが、現実はどうかという、日本人にとって英語の母音の発音は難しいままである。筆者には、上記のような説明は事実を正しく伝えてはいるが、意外な勘違いをしていると思われるようになった。それは、「舌を動かさない(舌を弛緩させたまま緊張させない)まま舌の位置を変化させる」という条件で上記の現象を理解しようとする実験のなかで気づかされた母音発音の仕組みであった。

第一に、舌を弛緩させたまま高母音や低母音を実行しようすると、必然的に「顎に舌を乗せたまま」「顎を上下動させる」ことになる。つまり、口を狭く開けたり、大きく開けたりする現象が生じることになる。この場合、顎を若干下に下げて母音を発音してみると「い」に近い母音になり、さらに顎を下にさげると「え」に近い母音が、さらに下げると「あ」に近い音の変化を生じさせることができる。しかし、日本語の「いえあ」とは全く音質が違う。

第二に、舌を弛緩させたまま、唇を丸めて高母音や低母音を実行してみると、舌が高い位置の時には「う」に近い母音が発音でき、舌を低い位置に動かしていくと「お」に近い母音を発音することができる。しかし、この場合でも、日本語の「うお」とは音質が根本的に違う。

このように試みてみると、舌自体を動かさなくても顎の上下動と唇の丸めによって母音を変化させることが可能になることに気づかされる。このような発音の仕組みをさらに実行していくと、「いえあおう」以外の母音を発音することも可能になることに気づく。たとえば、「前舌」という用語の「前」という定義に注目し、「顎自体を前に突き出す」ようにして母音の変化を聞いてみると、顎が高い場合は、より「い」に近い母音が発音できるし、顎を低くしていくと「え」から「えあ」のような母音も発音可能になる。つ

まり、英語の母音の発音で「前舌」というのは「顎を前に突き出す動きにより舌の位置を前に移動させる」ということなのではないかと気づかされるのである。それでは、「後舌」とはどういう現象であろうか。

やってみれば顎を奥に引くことはできる。しかし、顎だけを奥に引く動作では母音を発音してみても「う」「お」をより明確には発音できない。そこで、唇を丸める動作を中心に意識し母音を発音してみると、高母音では「う」を、低母音では「お」をより明確に発音できることが理解できた。また、舌を弛緩させたまま「う」「お」に近い母音を発音するためには唇を丸める必然性が確認できた。しかし、この場合も、やはり日本語の「う」「お」とは音質がまったく異なっている。つまり、英語でいう「後舌」とは「唇を丸めることにより若干舌を奥に引く」ということなのではないだろうか。

このように考察すると、音声学的な用語である「前舌母音」「後舌母音」という言葉も日本語の母音発音の常識で理解すべきではないことが分かる。その違いの根本的要因は、「舌を意識的に動かす」か「舌を弛緩させたまま」で母音を発音するかという点であることになろう。なお、唇の形という観点から見ると、英語での前舌の場合は、顎を前に突き出すので唇が左右に開くことが分かる。筆者自身も今まで英語の [i], [e], [æ] の発音のときは「唇を左右に開く」と指導してきたが、それは付随的に生じる見た目の違いであって、本質的な違いではなかったように今では考えている。

以上、この節では、日本語と英語の舌の動きに注目して母音の発音の音質の違いを明確にしてみた。

1-3 音節の定義

日本語と英語の発音上の違いを明確化する場合に「音節」の構成の違いが注目されている。音節には一般に4種類⁽³⁾あると分類されている。以下のとおりである。

- (1) 母音 (V)
- (2) 子音+母音 (CV)
- (3) 母音+子音 (VC)
- (4) 子音+母音+子音 (CVC)

上記の (1) と (2) のように母音で音節が終わる場合を「開音節」、また (3) と (4) のように子音で音節が終わる場合を「閉音節」と呼んでいる。一般的には、日本語は開音節の言語であり、英語は閉音節の言語といわれている。しかし、この開音節と閉音節という分け方に日本語話者が英語を難しいと思わざるをえない要因があるのではないだろうか。

一般に日本人は“book”をどのように発音するのだろうか。発音記号で表記しなく

とも、綴りを見れば、この単語が閉音節であることが分かる。つまり、子音+母音+子音という形式なので閉音節である。この発音を教えるとき、中学までの英和辞典はカタカナ表記をもちいて発音を示している。たとえば、「ブック」と表記している。だが、もしこのブックを、「bukku」と発音したら母音の「う」で終わるので開音節になってしまう。この誤解を避けるためにネイティブが発音をしたCDをよく聞いてまねるようにとの指導が必要になってしまう。そこでCDを聞いてみると、“book”は「ブッ」としか聞こえないような発音が多い。確かに、「ブッ」という発音なら日本語でも閉音節に分類されるだろう。それならば英語でも日本語でも閉音節になるのだから一致しているという点で矛盾がない。しかし、疑問が残る。いったい「ク」はどうして消えてしまったのだろう。英語を初めて教えられる中学生はこんな矛盾と疑問に悩まされながら、結果的に英語の発音は難しいという印象を持ってしまうのだろうか。このことについては第2章で検討する。

英語には二重母音や三重母音がある。“House”の発音は「ハウス」ではなさそうである。英語の場合、“ou”は[au]と発音される二重母音といわれ、一つの母音と理解されている。ゆえに、“house”は、子音+母音+子音という構成になり、母音が一つなので「一音節」と判断される。「ハウス」はどうなのだろう。もし、「ha-u-su」と発音されれば、母音が三つなので「三音節」と理解されるし、「ha-u-s」のように「su」の「u」が発音されなければ、母音が二つになるので「二音節」と判断されることになる。明らかにカタカナで表記されれば英語と日本語では音節数が不一致になってしまう。英語の二重母音や三重母音はこのように日本語には対応しないのである。どうすればよいのだろう。

筆者が英語の発音を研究する切っ掛けになった映画がある。Audrey Hepburn主演の*My Fair Lady*である。“Rain in Spain stays mainly in the plain.”をイライザが何度も何度も練習させられているのが印象的であった。これは、[ai]を[ei]に修正することが目的なので理解するのは簡単であった。しかし、とてもショックを受けたのは、ヒギンズ先生がピカリング大佐と母音の話をしている場面であった。それは、「イエアオウ」と聞こえる母音を一息で連続的に発音してしまう事実であった。英語の母音は異なる音を変化させながら一音節として発音できる仕組みになっている。だから、二重母音とか三重母音とか五重母音でさえ発音可能なのである。この点で、筆者がいかに日本語の発音習慣で二重母音や三重母音を理解していたかに気づかされた。日本語の「アイ」にしる「エイ」にしる「ア」「イ」や「エ」「イ」という二音節の発音になると常識的に理解している。この二つないし三つの異なる母音が一音節で発音されるか、または二音節や三音節で発音されるかは明確な違いなのであって、英語と日本語の母音の発音を異質なものにしている要因なのである。

であれば、なぜ日本語では「アイ」「エイ」が二音節になるのであろうか。

1-4 声門閉鎖音の必要性

「あい」を「愛」という意味で発音してみると、喉の奥の方で「あ」と「い」を微妙に区切っていることに気づかされる。これは、あまりにも自然な現象なので無意識に行われている。そうではないだろうか。それでは、喉の奥の方というのはいったいどこなのだろうか。比較してみると「ん」よりももっと奥の方が動いていることが分かる。そこは、声帯ではないだろうか。音声学の本を見てみると、声帯を閉じて息を止める方法を「声門閉鎖音」と呼んで、子音に分類されていることが分かった。つまり、日本語で「あいうえお」を明確に区切って発音するためには声門を閉鎖させて区切ることが必要で、声門閉鎖音という子音の存在が不可欠なのである。

日本語は音節が母音で終わる「開音節語」として分類されている。世界の言語はどうかといえば、一般に南方系の言語の発音は開音節が多い。「アロハ」というハワイ語がとても親しみやすい。歴史的な興味で調べてみれば、古代メソポタミアのシュメール語やアッカド語も声門閉鎖音を使用していたらしい。ということは、語尾が母音で終わる言語は開音節語で母音の後に声門閉鎖音で音節を区切っていることになる。この現象は人類にとってあまりにも自然な現象なので無意識に行われている。だから日本語でも無意識に「愛」を「あ」「い」と区切って発音していることが理解される。日本語の明確な母音の発音には声門閉鎖音という子音の存在が不可欠なのである。

それでは、英語の二重母音なり三重母音、はたまた五重母音をどう理解すべきなのだろうか。

1-5 日本語と英語の母音の発音方法の違い

上記の考察で「あい」や「えい」という二つの母音を明確に区切るには声門を閉じるという無意識的動きがなされていることが理解された。それでは「アイ」「エイ」を一つの音節として発音するにはどうすればいいか。それが問題になる。しかし、その答えはもう明らかになっている。つまり、声門を閉じないで息を吐き続けることである。声を出し続け「ア」から「イ」へ母音を変化させることが二重母音を一音節で発音するという現象になる。日本語でこの現象を確認するためには、「あーい」「えーい」「おーい」⁽⁴⁾と発音してみれば、二重母音化していることが分かる。つまり、「あ」と「い」を区切らず発音しているのである。とくに「おーい」と呼びかけてみると、「おい！」と呼びかけるのとは違うことが分かる。このように理解すれば、英語の二重母音や三重母音は日本語のように声門閉鎖音で区切ってはいけぬ母音なのである。この点に日本語と英語の母音発音の大きな違いがあると気づかされるのである。

これまでの議論を要約すると以下のようなろう。

- (1) 日本語と英語の母音を発音する時の発声法と舌の動きに違いがある。
- (2) 音節という観点から分析すると日本語は開音節、英語は閉音節に分類されている。
その大きな違いの要因は、声門閉鎖音である。

以上、第1章では、日本語と英語の母音の音質の違いについて再検討した。

第2章

第1章では、日本語と英語の母音の発音について検討し、その違いを明確化した。その結果、声門閉鎖音を意識すれば、「子音+母音+子音」という発声の機能は両言語とも同様であることが理解できた。この章では、子音に焦点を当て、日本語と英語の発音上の違いを明確にしてみたい。

2-1 声門破裂音と声門閉鎖音は子音と理解する

ハワイ語のようなポリネシア諸国語は開音節を特徴とし声門破裂音や声門閉鎖音の存在が認められている。声門破裂音とは一度声帯を閉じて息を止めてから母音を発音する時に生じる。「あ」という母音の発音は、「声門破裂音+母音」という構成になっていると考える。一方、声門閉鎖音とは母音を発音した後に声帯を閉じて母音の発音を終了するときに生じる。「あ」という母音の終了は「母音+声門閉鎖音」という構成になっている。英語音声学では、この声帯を閉じる現象は、子音と理解されており、[h] が発音記号として使われている。とくに声門破裂音は [h] で表わされることが通常である。たとえば、“hah” というスペリングは「はあ、おや、ほう」という意味を表す感嘆詞であるが、日本語では「ハー」というような発音となる。アルファベットの“h”を「声門を閉じる」ことを表わす記号だと理解すれば、“hah”は「声門破裂音+母音+声門閉鎖音」という音節の構成になる。これは日本語の「あー」と同じ音節構成と言える。「あー」の発音は「声門を閉じてから母音を発音し、声門を閉じて終了する」からである。つまり、「声門破裂音+母音+声門閉鎖音」という音節の構成になる。この観点から察するに、日本語と英語の発音は声門破裂音および声門閉鎖音を子音と理解する時に、音節構成が完全に一致しているといえる。

2-2 子音の役割

日本語でも英語でも子音の役割は同じである。すなわち、「呼気を止める、または、止めようとする」行為である。この点に注意すれば、母音の発音のためには、初めに「息を止める」次に「母音を発音する」最後に「息を止める」という過程が必然といえる。つまり、音節とは、必然的に「子音+母音+子音」(CVC)なのである。文字の観点か

から見れば、母音で終わっていると判断し、開音節だと分類できるが、発音の観点から分析すれば、すべての言語は閉音節といえよう。開音節語であろうとも、声門閉鎖音という子音で最終的に呼気を止めていることを否定できない。

日本人にとって英語の発音が困難だと感じられる原因は、閉音節での最後の子音が「呼気を止める役割である」という現象に気づけないからである。実際、英語では、声門閉鎖音以外の子音で母音の発音を終了する 경우가ほとんどである。ここで、再び、“book”の発音に注目しよう。“Book”の発音がCDを聞くと「ブック」のように聞こえるのはどうしてだろう。それは、“k”という子音で呼気を止めているからである。“Good”の発音が「グッ」のように聞こえるのは“d”という子音で呼気を止めているからである。さらに、“morning”の発音が「モーニン」のように聞こえるのは“g”という子音で呼気を止めているからである。従って、“Good morning”は「グッモーニン」のように聞こえるのである。この子音の役割を理解せず、「ブック」「グッド」「モーニング」とカタカナ表記してしまうことが日本人にとっては英語の発音をそもそも誤解させる根本原因なのである。子音の役割を明確に説明すれば、中学生には十分理解でき、英語の発音が上達する可能性は十分ある。

2-3 ‘With a little bit of luck’ の分析

先に言及した*My Fair Lady*は、ロンドン訛りを標準英語に修正する物語でもある。同じロンドンに居住しながら英語の発音は少々異なっているのである。たとえば、“with a little bit of luck”という語句は、「ウィヴァ リル ビッ ア ラッ」のように発音される。コックニーで“th”を“v”で代用するのは驚きではあるが労働者階級の人たちは“th”の子音を持たない民族なのである。この点は、日本人と同様といえる現象である。

さて、問題は、声門閉鎖音である。実は、ロンドン訛りの特徴には「声門閉鎖音」を使うという現象がある。その例が、上記の語句である。この例では“t”と“f”という子音が声門閉鎖音で代用されている。ゆえに、声門閉鎖音を“-”で表わすならば、“li-le bi- o- luck”と発音されているのである。この違いは、日本人にはおそらく全く聞き分けられない違いであろう。なぜなら、英語はリズムとイントネーションが重要であり、リズムが正確ならば同じように聞こえるからである。違いは、“t”と“f”という子音で呼気をとめるか、それとも声門閉鎖音で呼気を止めるかの違いにすぎない。“Rain”を「ラーイン」と発音すれば、日本人でも母音の違いは認識できる。しかし、子音の違いになると、声門閉鎖音を意識しなければ、その区別は非常に付き難い。

2-4 How kind of you to let me come.

*My Fair Lady*の中で、“How kind of you to let me come.”を発音練習している場面

がある。ここで問題にしたいのは、“kind”の母音 [ai] の [a] が後舌の [ɑ] になる部分の矯正ではなく、“kind of you”の“f”と“let me come”の“t”が声門閉鎖音になるという現象である。カタカナで表記すれば、「カインダ ユー」や「レッ ミ カム」になってしまうことである。この場面の直後に、“a cup of tea”の発音を練習するところがあるが、これも“f”が声門閉鎖音になり「カップ ティー」のように発音される。これらのロンドン訛りはもちろん通じる英語の発音である。だから特別矯正する必要はあるかはまた別の問題であるが、声門を閉鎖せずに“f”や“t”という子音で呼気を止めるという行為が標準の英語の発音なのである。

このようにコックニーはロンドンで通用しているにもかかわらず、日本語と同様、「呼気を止める」という「子音」の役割を「声門閉鎖音」で代用しているのである。

2-5 日本語と英語の子音の使用法の違い

これまでの考察で子音について明らかになったことは、日本語と英語では子音の使い方が明確に違うということである。以下のようにまとめてみよう。

- (1) 日本語の「あいうえお」の発音は開音節と分類されているが、実際の発音上は「声門破裂音+母音+声門閉鎖音」という構成になっている。
- (2) 英語の母音は閉音節であると分類されており、実際に「子音+母音+子音」という音節構成が多い。
- (3) 日本語「かきくけこ」のような発音は「子音+母音+声門閉鎖音」という音節の構成になっている。
- (4) 英語の“a”“e”“i”“o”などの発音は「声門破裂音+母音+子音」という構成が考えられる。この場合、最後の子音は声門閉鎖音で代用される可能性もある。

上記のように確認すると、日本語と英語の子音の使用法に一つだけ大きな違いが確認できる。それは、音節の最後で呼気を止めるのが「子音」であるか「声門閉鎖音」であるかという根本的な違いである。日本人には、「子音で呼気を止める」という習慣は、その現象を意識し、練習し、学習しないと自然にはできないといえる。この現象が日本人の英語の発音を困難にしている根本的原因だと理解できる。

第3章

上記の各章で、日本人が苦手とする英語の発音の日本語との違いを明確化してきた。この章では、それらの違いを意識し、如何に教育するかという観点から検討してみたい。

3-1 母音の発音を教える工夫

英語の母音を発音するためには以下のことを実行する必要がある。

- (1) お腹を膨らませて息を吸い、腹筋に力を入れて母音を発音する。
- (2) 舌を動かす意識を完全になくし、代わりに、顎を上下動させ、唇を丸める動きを意識する。
- (3) 前舌の母音 [i] [e] [æ] は顎を前方にスライドさせるように発音する。
- (4) 後舌の母音 [u] [o] [ɔ] は唇を丸めて発音する。
- (5) 二重および三重母音は、声門を閉じて区切らずに発音する。

上記のことを英語学習の初めに指導することは可能であると思われる。筆者も現在中学生を対象に実験している。要は、英語をリズムよく発音することが目標なのである。

3-2 子音の発音を教える工夫

英語の単語や語句の発音を英語らしく発音するためには、以下のような子音発音の指導が必要となろう。

- (1) 英単語の音節の最後に子音がある場合は、その子音の形を実行し呼気を止める。その場合、「ブック」であれば、「ク」を頭の中だけで発音し実際には発音しない。
- (2) 語句の発音で、前の単語の音節が子音で終わり、次の単語の音節が子音で始まる場合は、前の子音で呼気を止め頭の中でその子音を発音する。
- (3) 語句の発音で、前の単語の音節が子音で終わり、次の単語の音節が母音で始まる場合は、前の子音と次の母音を連続的に発音する。

上記のことを指導できれば子音の処理が英語らしくなり、リズムが刻みやすくなる。

3-3 英語のリズムを教える工夫

英語のリズムを実際に習得させるのにどんな教材を用いればよいかについて提案したい。筆者は、学習院大学文学部イギリス文学科の学生時代から英語朗読活動に携わってきた。当時は荒井良雄教授の下でナーサリー・ライムズや英詩、英語の短編や演説、聖書等を英語で暗誦朗読する活動をしていた。そのような経験の中で、英語学習はナーサリー・ライムズで始めるのが最善ではないかと考えている。本学の授業でも英語発音の導入は以下のようなナーサリー・ライムズを使用している。

- (1) Pat a cake, pat a cake, baker's man

- (2) Humpty Dumpty
- (3) Peter Piper picked a peck of pickled pepper
- (4) This is the house that Jack built

例として、“Pat-a-cake, pat-a-cake, baker’s man” を取り上げてみよう。

Pat-a-cake, pat-a-cake, baker’s man,
Bake me a cake as fast as you can;
Pat it and prick it, and mark it with T,
Put it in the oven for Tommy and me.

(1) 強勢のある母音の学習

前舌母音：

- [æ] の練習：pat, man, can
- [ei] の練習：cake, baker, bake
- [i] の練習：prick
- [i:] : T, me

中舌母音：

- [a:] の練習：fast, mark
- [ʌ] : oven

後舌母音

- [u] : put
- [ɔ] : Tommy

(2) 子音と母音を連続して発音する学習

- [t] + [ə] : pata, fastas, itand
- [k] + [ə] : cakeas,
- [t] + [i] : patit, putitin
- [k] + [i] : prickit, markit
- [z] + [j] (半母音) : asyou

(3) 子音で呼気を止める学習

- [k] : cake, bake me
- [z] (呼気を完全に止めることはできない) : baker’s man, as fast
- [n] (呼気を完全に止めることはできない) : man, can, oven, in the
- [d] : and prick, and mark, and me

[t] : it with

[ð] : with T

(4) 母音と母音を二重母音化させる学習

[i] + [ɹ] : me a, Tommy and

以上、ナーサリー・ライムズを使って発音練習する例を示してみた。欧米の子どもたちが日常学習する教材で楽しく文化を学びながら発音練習することが可能である。

結論

立派に英語を話せる日本人や日本人英語教師は多いにもかかわらず、日本における英語教育は、社会の批判を浴びている。どうして日本の英語教育は音声でのコミュニケーション能力を育成できないのだろうか。こんな問題の解決がこの論の目的であった。今日まで多くの学者や英語教師がこの問題に取り組んで研究し成果を発表している。こうした努力を無駄にしないためにも、今までの様々な研究成果を考察し、この問題に終止符を打とうと試みた。

筆者のこれまでの英語教育の経験も踏まえ、日本語と英語の発音上の明らかな違いを明確にできたのではないだろうか。それは、声門閉鎖音の使用法にあった。声門で呼気を止めるという現象が日本語と英語の発音の大きな違いの原因であったと結論したい。発話の時に呼気を声門で止めることが自然に実行されている日本語にとって、子音で呼気を止める英語は、まさに異文化の言語といえよう。しかしながら、声門閉鎖音をしつかり子音と定義するなら、開音節語である日本語もCVCという構成を持つ閉音節語であると理解でき、世界の言語はすべてCVCであろうという仮説が成立すると思われる。

以上、この論では日本語と英語の母音と子音について比較検討し、英語が基本的に腹式呼吸を基盤に強く呼気を吐き出し発声する言語であることを確認した。したがって、その強く吐き出される呼気を止めるために子音の働きがあることを確認した。一方、日本語は基本的に胸式呼吸を基盤とする穏やかな呼気の吐き出しにより発声する言語であり、母音の発音を止めるのは声帯の閉鎖であることが確認できた。

これらの言語上の現象的違いを何とか乗り越え初期の英語学習を改善する提案が多少なりともできたのではないだろうか。最後に一言加えるならば、元学習院大学文学部イギリス文学科教授荒井良雄先生の「英語は使えば上達する」という簡潔な教えに説得力を感じざるをえない。

注

- (1) 「日本人の英語はなぜネイティブに通じないのか?」, 学習院女子大学紀要第13号, 2011. pp.75-89.
- (2) 本論における英語音声学上の用語については、竹林滋著『英語音声学入門』（大修館書店, 1982）

英語はなぜ日本人には難しいのか：日本語と英語の発音上の根本的違い

を参考にしている。

- (3) 「ウィキペディア」 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9F%B3%E7%AF%80>) 「音節」 参照.
- (4) 西野博二, 「日本語の音節は本当に開音節か？」
(<http://www.asahi-net.or.jp/~va4h-nsn/syllable.htm>) 参照.

(本学非常勤講師)